

プレーバック 知事選

2007～22年

下

県官製談合事件に伴う安藤忠恕の辞任で冬に移った第17回知事選は、2007年1月4日に告示された。立候補者5人のうち有力と目されたのは、元林野庁長官の川村秀三郎(当時57)と、元経済産業省課長の持永哲志(当時46)だった。

自民党県連や県農民連盟などが推薦した持永と、自民勢力の一部が支援に回った川村が保守分裂の争いを繰り広げる中、当時49歳だったタレントの東国原英夫(68)が割って入る。当初は冷やかな見方もあったが、知名度を生かして草の根で支持を拡大。64・85%の高い投票率も背景に26万6千票を獲得し、19万5千票の川村、12万票の持永らを

東国原 組織選挙に風穴 河野「オール宮崎」築く



2007年の知事選で当選した東国原英夫＝宮崎市・宮崎観光ホテル



2010年に初当選した河野俊嗣＝宮崎市・宮崎観光ホテル

を圧倒した。

官製談合事件で政治不信が漂う中、「しがらみ」の俊嗣(61)だ。東国原が1期なで従来の選挙に風穴を開けた東国原。自民県連役員だった県議の坂口博美(78)は「無党派層に風を起したが、まさか当選する」と、当時の衝撃を振り返る。自身が支えた持永は、ダブルスコア以上の大差での落選。「自民や農民連盟なくして知事選は勝てないという、本県政界の神話」が初めて崩れた選挙だった。

◇ ◇
東国原が副知事に起用し

たのが、広島出身で総務省から県に出向していた河野俊嗣(61)だ。東国原が1期限りでの退任を表明すると、46歳だった河野は2010年末の第18回選挙に立候補する。事実上の後継者と見る県民は少なくなかった。

河野の名乗りを受けて、JAグループ宮崎など主要経済10団体でつくる県経済団体協議会は「協力」を決定。主要政党も「協力」や「支援」を打ち出し、「オール宮崎」が完成する。当時の県内JAトップで同協議会会長も務めた羽田正治(89)は「県外出身だからこそ、政争のないクリーンな政治や、多面的な視点による農業の活性化、口蹄疫からの復興も実現できると期待した」と語る。

4人が出た選挙は、東国原支持層も取り込んだ河野が29万3千票で初当選。20万票以上差の次点だった元県商工観光労働部長の中馬章一(80)は「誰もかなわないう。結果は見えていた」と述懐する。そうした空気に口蹄疫の混乱による厭戦ムードも加わり、投票率は40・82%に落ち込んだ。河野はその後、2回の選挙で圧勝。4選を懸けた22年は、返り咲きを期す東国原を僅差で制し、底力も見せた。

今年12月27日投票の第22回選挙は現時点で、再び相まみえる2人に元県議の右松隆央(58)が絡む構図だ。宮崎公立大名教授の有馬晋作(行政学)は「知事は住民の福祉向上のために県政を運営するトップリーダーだ。人口減少下でも行政サービスを維持し、本県の強みを生かした新たな政策を展開できる人材を見極めてほしい」と県民に求めた。(敬称略)